

令和元年度タイ王国交流訪問報告書

美郷町立美郷中学校
校長 千田寿彦

令和元年8月14日（水）～8月19日（月）

引率教職員： 3名〔校長 千田寿彦、教諭 S.、教諭 K.〕

派遣生徒：12名〔1年 ○○○○○、○○○○、2年 ○○○○、○○○○
○○○○、○○○○○○、3年 ○○○○○、○○○○
○○○、○○○、○○○、○○○○ 〕

タイ・ノンタブリー県・アニューラチャプラシットスクール見聞録

1日目〔8月14日（水）〕

<p>概要</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・目的地であるタイ王国ノンタブリー県へ向かい、ノンタブリパレスホテルに順調に到着した。ほぼ、予定どおりであったが、台風10号の影響による航空路の混雑のため、羽田空港出発は予定よりも約40分ほど遅れ、その遅くれのままスワンナプール空港への到着となった。 ・空港ではノットさん他3名の職員が笑顔でとっても温かく親しみをもって出迎えてくれた。 ・ホテルではアニューラチャプラシットスクールのカンナ校長が出迎えてくれたほか、女性の教育局次長も夕食に同席してくれた。 ・初日、体調を崩す生徒もなく、翌日に備えて就寝。 <div style="display: flex; flex-wrap: wrap;">       </div>
<p>日程内容</p>	<p>美郷中学校発5:40 = 秋田空港発7:30 = 羽田空港発11:45 = バンコク・スワンナプール空港着（現地時刻）16:30 = ノンタブリパレスホテル着（現地時刻）18:50</p>
<p>所感</p>	<p>・早朝の集合時刻設定であったが、派遣生徒家族の協力により順調に出立することができた。福田世喜教育長はじめ、町教育委員会及び学校教職員の見送りに感謝したい。</p>

- ・「Health 健康」「Challenge チャレンジ」「Friend 友情」の三つを本訪問団のキーワードと確認した。
- ・ノットさんは、日本及び秋田県を4回訪れているらしく、米田進秋田県教育長、福田世喜美郷町教育長など、多くの県や町関係者とのつながりのことや、味噌汁が好きなことなどを語ってくれた。
- ・スワンナプール空港からノンタブリパレスホテルまでの移動は、日本製トヨタ車のワゴン2台に分乗し、高速道路約2時間弱を要した。
- ・高速道路は片側3～4車線の大容量であったが、車両数が多く、それぞれの速度もかなり出ていた。車線はあっても意味をなしておらず、路側帯走行や車線を跨いでの走行は当たり前であった。タイの国民は運転が上手なのか、割り込みに大様なのか、マナーに無頓着なのか理解に苦しんだが、そこが「マイペンライ」の精神なのかもしれない。
- ・とにかく日本車が多い。圧倒的にトヨタ、ホンダ、ニッサン、続いて三菱、マツダ、スバル、スズキといった様子。ドイツ車もときどきみるがアメリカ車はほとんど見ない。理由は不明。
- ・タイ料理は須く辛く、タイ米はさほど違和感なく喉から食道を通過した。もちろん、長粒子でモチモチ感はないが、一緒に食する物や調理法によるなど、風土に根ざす所以であろう。
- ・夕食に同席した教育局次長がプレゼントしてくれたマンゴスチンを早速皆で食し、舌鼓。流石、本場。ノンタブリー県はマンゴスチンが名物とのことであった。
- ・ホテルのレストランでは、音源に合わせたピアノ伴奏によるカラオケで歌う人が後を絶たず、終始賑やかであった。カナ校長も数曲連続で歌ってくれた。歌好きの国民性のようである。曲想は日本の現代演歌風である。
- ・早朝の集合で、タイに到着後は2時間遅れの時差もあり、生徒には長い1日となった。タイで20時の就寝は、日本時間の22時。夕食は疲れ気味であった。
- ・初飛行や初外国でやや気持ちの高揚気味の生徒もいるが、総じて落ち着いており、自己管理もよくなされ、節度が保たれている。
- ・飲料水に配慮したことによる荷物の重量超過が秋田空港での課題である。各家庭で体重計等の活用による重量調整の重要性を、事前学習で強調すべきである。
- ・羽田便の座席ポケットに乗り換えチケットを置き忘れた生徒(H.H)がいたが、木村次長が落ち着いて対処してくれた。生徒の心も落ち着き、全生徒が互いにチェックし合う心構えが強化された。
- ・ホテルのバスルームを覗き、当初から気になっていたことが改めて現実となった。飲食の臭い、味覚、食材、調理法に加えて、生活の重大なポイントはトイレである。
- ・トイレは、かつて経験したマレーシアと韓国の流儀を合わせた方式である。ここで大切なことは「水洗トイレ」の「水洗」の考え方である。

マレーシアは、自分の体とトイレの器の両方を「水洗」するので、ある意味で先進の清潔感であるが、トイレットペーパーがなく、ペーパー等で拭くという概念と道具が存在しなかった。洗った後どうやっていたのか当時から疑問は解決していない。器の脇に体を洗うホースがだらりと下がっている。触りたくなる物ではなかった。一方、韓国はトイレットペーパーは備え付けられてはいるが、流してはいけない。理由は分かっていない。なかなか聞くことができなかった。脇に役割を終えたペーパーを入れる箱が置かれている。蓋はない。それを脇に見ながら用を済ますのも、なかなか落ち着かなかった。タイは、マレーシア同様に体も器も水洗し、ペーパーは流さずに脇のボックスに入れる。しかも、ホテル以外ではトイレットペーパーは備え付けられていない。学校の生徒用トイレや飲食店では、入り口付近にペーパーが付けられており、そこから必要量を手にして個室に入り、用が済んだらボックスに入れてくる。収集した情報によると、水道管が細く、水圧も弱いため詰まってしまうようだ。

- ・大切な心構えは、ホテル以外では極力トイレを使用しなくてもよいようにすることである。飲まず、食わず、おなかを痛めず。

2日目〔8月15日(木)〕

概要

- ・ノンタブリー県知事を表敬して歓待を受け、その後アニュラチャプラシッドスクールを訪問して、歓迎セレモニー、授業参加、ホストファミリーとの対面などが予定どおり進んだ。
- ・生徒はすこぶるよい表情で活動に臨んでいる。(同スクールのホームステイ担当から各ホームでの様子がたくさんの画像で伝えられる。)





日程
内容

ホテル発7:45 = ノンタブリ県庁、県知事表敬9:00
 = アニュラチャプラシットスクール訪問10:30
 = 昼食、授業参加、ホストファミリーとの対面
 = 各ホストファミリー宅へ15:30 = 引率者は市内散策研修及び夕食

所感

- ・ 6時の朝食前でも辺りは明るくならない。夜明けが遅い。緯度と太陽の位置の関係だろうか。
- ・ 生徒は、朝6時頃から順調に朝食会場へ集まり、それぞれ好みの食べ物を手にとっていた。基本的にはタイ料理中心だが、トーストや辛みのないスープもあり、困っている様子はなかった。朝からフルーツがおいしい。ドラゴンフルーツ、マンゴスチン。7時45分の出発集合も立派である。
- ・ ワゴン車2台に分乗し、食事や買い物で賑わう朝市の界隈を横目に学校に向かうが、通勤ラッシュで道路は混雑。速度と車線無視のスリルは一入である。タイは車社会という。よく見ると、ワゴン車には学校のマークが付いている。
- ・ 改めて気づいたが、交差点での右折がない。交差点がない。信号がない。全くないのではないが容易に見かけない。黄色の点滅（夜は赤の点滅）が時折目に入るだけで、信号で車が止められることは滅多にない。左折を3回すると右折になる仕組みである。これは、マレーシアでもそうだった。時折、立体交差の一方通行で右折Uターンをすると聞いた具合。したがって、横断歩道も少なく、あっても意味をなしていない。速度を抑制するために意図的に段差を付けた小路もあり、少し安堵した。車の空調はもちろん青色（冷房）のみというのも当然にして、新鮮である。
- ・ 県庁に到着して表敬までの約30分ほど、庁舎前広場のミニマーケットを散策した。生徒は装飾品などを購入していた。市内の至る所に国王を讃える飾り棚が目につくが、隣に国王の母の肖像も飾られている。8月15日は国王の母親の誕生日とのことであった。王室を敬愛する心情が至る所に示されている。当然、学校は入り口から各教室に至るまで、国王と仏教を敬う姿勢が展示や掲示で表されている。
- ・ 知事表敬前に、北都銀行バンコク駐在事務所長佐藤孝弘氏他職員2名と会い、表敬の打ち合わせをした。北都銀行はバンコクを拠点に東南アジアの市場を把握しているとのことであった。シンガポールは経済

の拠点ではあるが、バンコクは東南アジアのハブ都市として流通の中心であるらしい。古くアユタヤ時代が交易経済の拠点であったことに由来するらしい。

- 北都銀行職員で国際教養大学出身のタイ人プーンさんが通訳を務めてくれ、相互理解が円滑に進んだ。感謝したい。有能な人材が活躍している。
- 知事は所用につき、女性の副知事が、そして新教育局長も同様に男性の教育局次長が対応してくれた。副知事は日本を何度も訪れている親日家であった。本行流事業の意義を強調して継続の意向も示され、タイの象徴である像の小物を一人一人に手渡すなど、生徒にも温かく接してくれた。
- 庁舎警備に当たっていた軍人のような出で立ちの人たちは、軍ではないといていたが、物々しい雰囲気がありながら、テイクアウト風のアイスコーヒーのストローを口にするなど、その落差が穏やかな国柄を表していた。
- アニュラチャプラシットスクールでは、到着から一日中、学校を挙げての歓待に、ただただ「コップン・カー（ありがとう）」と合掌の連続であった。
- 校舎入り口で民俗舞踊（女生徒の踊りと男女混合での打楽器演奏）が歓迎してくれた。民俗舞踊の部活動の生徒とのことであった。タイと日本の国旗を張り巡らし、生徒一人一人も旗を手にして、「サワディー・カー（こんにちは）」と笑顔で語りかけてくる。中には、日本語で「コンニチハ」と挨拶してくれる。必ず、胸の前で合掌し、軽く腰を折る。強い日差しと賑やかな鳴り物に包まれて、両国旗と装飾の花々、そしてきらきら輝く瞳と満面の笑顔の歓迎通路である。感激のあまり言葉を失った。南国は国内外を問わず色彩鮮やかで、気分も明るく和む。
- 幼、小、中、高校までの総合学校で児童生徒約2千人、教職員約2百人という超マンモス学校である。その中のエリートであるイングリッシュプログラムの生徒が歓迎セレモニーに参列した。
- ここでは男性の教育局次長、校長が挨拶を述べ、生徒一人一人に記念品を贈呈し、学校に学ぶ生徒の仲間入りを認めてくれた。学校紹介映像、ホストファミリーとの対面に、再び女生徒による民俗舞踊も披露された。
- 美郷中学校の生徒も全員が堂々と英語による自己紹介を披露し、大きな拍手をもらった。プレゼンテーションは立派であった。
- 到着セレモニー後の休息や歓迎セレモニー後の昼食では、ご当地の飲み物、菓子、食事、フルーツがふんだんに供され、まさに心尽くしである。トム・ヤムスープの拉麺仕立てはとてもおいしかった。それもやはり、じんわりと辛みが喉から食道を追いかけてきた。和菓子に似たものもココナッツのスライスで包まれ、ドリアンを米で煮込んだも

のもココナッツで仕上げ、ココナッツジュースには当然ココナッツの実が入っているなど、飲食物にココナッツは欠かせないらしい。この香りと味付けが、人によってはなかなか馴染めない。そして、ドリアンとの取り合わせはかなり強烈で、匂いも甘さも表現の言葉が見つからなかった。

- イングリッシュクラスは、1クラス20人程度で同学年3学級ぐらいのようだった。その一つに美郷中生12名が仲間入りさせてもらい、丁度2年生に相当するクラスの比較級の学習であった。やや一問一答気味の問題消化型で展開された。反応力のある生徒の発言で進展している感は否めない。美郷中生も負けじと発言するなど、学校代表の心意気を示してしていた。教科書も問題中心、文法重視の感があった。クラスリーダーらしき生徒のリーダーシップは素晴らしく、他の生徒もイングリッシュクラスに学ぶ自信と誇りに満ちた表情で学習に臨んでいる。授業終始の挨拶は起立・礼であった。基本は仏教と軍隊方式。
- 公立学校でありながら、そもそもが選抜試験をくぐり抜けたエリート集団である。タイ国内のNo.6と言っていた。何のランクかは不明だが、ナショナル試験の結果の上位がほとんどバンコク市内の学校となっているらしく、ノンタブリー県のトップ校であることは間違いない。ここに入れなかった子どもは、別の学校へと振り分けられていくそうだ。
- タイ文化の学習として、花輪や菓子作りにも挑戦した。和菓子の小豆餡菓子に似たようなもので、おいしかった。こうした実学も重視しているとのことであった。
- 教室にはエアコンと天井扇風機があり、後方には冷水サーバーも設置されている。
- 市内散策では、タイの地図購入を目的に巨大ショッピングセンターを訪れた。日本企業の店舗も多く目に付いた。寿司屋は脂っこいサーモンが人気のようで、更に濃いマヨネーズや辛いものがトッピングされていた。後で聞いたが、基本は生魚は食さないらしい。
- 夕食はチャオプラヤー川に面したレストランに案内され、タイ料理を堪能した。今度はエビ(クン)の入った「トム・ヤム・クン」が出てきたが、あまりの辛さに降参。エビだけ少し頂いた。ここでも魚の姿揚げが出てきたが、前夜は海魚、今夜は川魚でも、魚は魚であって、固魚の固有種や名前は気にかけない様子であった。辛みの効いたソースが必ず付いてくるが、それはかけずにそのままが丁度よかった。
- ナイトマーケットに案内してくれたが、活気があることは、日中の巨大ショッピングセンターと同等である。売る方も買う方も、秋田県民にはない意欲と活気が感じられる。ただ、中華系のような激しく売り込む様子はなかったが、昼夜を問わずに商売に立っているし、消費者も常に多く取り囲んでいる。とにかくよく食べる。
- 市内散策からホテルに戻るまでの間、頻繁にホームスティの様子画像が送られてくる。かなり豪華な待遇を受けていることや、生徒が大

変楽しんでいることが分かり、納得と感謝で満たされた。

3日目〔8月16日（金）〕

概要

- ・アニューラチャプラシッドスクールの朝の様子をはじめ、学校生活の様子、美郷中生の体験している学習の様子、科学学習のイベントの様子等を参観させていただきました。
- ・午後は授業参観後に、学校の放課までの時間で生徒と近くの有名古寺院「Wat Chomphuwek (ワット・チョンフェイク)」を見学させていただきました。
- ・生徒がホストファミリーと下校した後、引率者は夕食へ案内された。約30分ほどの激しいスクールがあり、出発が遅れた。
- ・本日もホームステイの状況を送られた画像で知ることができ、生徒の満足そうな表情が溢れている。



日程内容

- ホテル発7:45 = アニューラチャプラシットスクール訪問8:10
= 朝の仏教の教え読唱、黙想、祈りに次いで、タイ式剣術体験、科学学習のイベント、昼食を挟んでタイの伝統工芸（パーム椰子の葉の織物工芸）体験等の参観
= 「Wat Chomphuwek (ワット・チョンフェイク)」寺院の見学後、各ホストファミリー宅へ15:30～16:50
= 引率者はスクール後に夕食

所感

- ・前夜に確認した出発時刻（7:00）に合わせて集合した引率者であったが、ノットさんたちは現れない。同じホテルにもう1人泊まっていたが、2人とも失念したとのことであった。笑顔で声高らかに謝罪しながらロビーに現れ、我々一人一人にタイシルクのお土産を手渡してくれた。我々も笑顔にならざるを得ない。「マイペンライ」かな。これがノットさんのポケットマネーか教育局予算かは知るよしもない。後

で聞いたが、ノットさんの過去の日本訪問費用は自己負担だそうだ。もちろん派遣された生徒も費用は家庭持ちだそうだ。「派遣」とは自ら志願して得る「名誉」という理解をしなくてはならないようだ。

- ・金曜日は、タイの伝統を守ることを衣服で示すことが政府によって決められた特別な日であった。女性はタイのコットンやシルクで織られたタイスカートで、男性はコットン素材の半袖シャツ（沖縄のカリユシ風）でタイスタイルの正装が義務づけられている。美しく、そして引き締まった印象である。
- ・毎朝8時から、小・中・高までの全生徒が集まり、校長の訓話、仏教の教え（教典らしき）のテキストを校長、高校の代表生徒の範読に合わせて唱読し、祈りを捧げ、黙想（瞑想か思惟か）をするそうで、美郷中生も前に並んで体験した。高校生が講堂らしきフロアに校長と並び、リーダーらしき生徒が分担をこなし、全校生徒が応ずる。日本の仏教の節回しのような音程やリズム感が保たれ、祈りも厳粛である。高校生は諳んじることができるレベルの生徒も多く見受けられた。中学生は講堂下の地面で、小学生は別棟のようであった。こうして、目指す生き方、人間像が明確に意識され、学業の目的意識も明確になり、輝く瞳で学習活動に取り組む生徒集団に育っている。
- ・一段落して本校生徒もその場で英語で自己紹介のチャンスを頂き、大分自信が付いてきた。ホストファミリー宅でものびのびと生活できたようで、元気に頑張っている。日に日に個性の発揮が顕著である。
- ・生徒指導上の問題はほとんどないそうだ。そのほんの少しの問題の内容を知りたかったが、聞くことはできなかった。テキストを数冊頂いたが、タイ語で理解不能。ただし、図書室をはじめ、至る所に仏陀の生涯を説いた本や、国、国王、王族、両親、目上、仲間を敬う教えを説いた本が置かれている。一色と言っている。その隙間に、ディズニーキャラクターの描かれた本などが置かれている。理数系のテキスト等も多い。
- ・タイ式剣術もムエタイと言っていた。タイ式ボクシング（キックボクシング）をムエタイと思っていたが、ムエタイは防御と攻撃を一体とした総合武術のようであった。指導者の前にかしこづき、鉢巻き風のを頭に付けられ、剣を授けられる儀式などは厳粛であり、生徒は日本の様々な武道に通ずる精神を感じ取ったようである。ここでも、クラスのリーダーらしき生徒の動きや上級生の動きは素晴らしい。
- ・科学学習のイベントでは、理数系のコースに学ぶ高校生がリーダーシップを発揮して、出店方式で化学実験等のデモンストレーションを行っている。中学生がそのブースで体験したことをスタンプラリー的な報告書にまとめようとしていた。全生徒の一直線に素直で、意欲的かつ活気ある姿は、私たちには大変新鮮に映った。
- ・ティッシュペーパーと糊と絵の具を使ったアート作りで、エコや身の回りの利用について学ぶブース、アイスクリーム作りの仕組みを説明

し、作って食べさせるブース、ドライアイスを使った面白実験ブース、植物の細胞を顕微鏡で見せるブース、解剖による大きな蛙の内蔵や豚の心臓の内部を紹介するブースなど、徐々にレベルが上がるようになっており、銘々に楽しんでいる。どういうつながりか不明だが、仮装が披露されたり、DJ風の司会者が盛り上げたり、文化祭のお楽しみの要素のある科学イベントで大盛り上がりである。

- ・女性引率者2名はタイスカートのデザイン性や着こなしにいたく興味を示し、カンナ校長、アップル先生、ソン先生、ノットさん等と話が盛り上がり、買い物まで指南していただいていた。
- ・カンナ校長は、巨大校の校長としての業務もこなしながら、常に我々に寄り添ってくれる、サービス精神旺盛な仕事師である。
- ・タイのもてなしの文化は、敬愛すべき仏教（仏陀）、国家・国王に次いで親や目上の者、そして仲間への敬愛、尊敬の気持ちと態度をきめ細かく表すことにあるようで、座れば飲料水にお菓子、食事、そして相手の希望を伺うことに余念がない。彼らは同席してその大体を食するが、それに呼応して食していると大変なことになる。とりあえず口を付け、「コップン・カー（ありがとう）」と合掌。須く、多様なココナッツ風味と強い甘味と辛酸味覚である。体調不良予防の「ビオフェルミン」と「かりんこ梅」、「梅しそ味の茎わかめ」が功を奏している。
- ・合間に特別支援教育のことを聞いた。幼少時に特別支援学校に振り分けられるそうだが、公立学校では費用がかかるため、私立の学校しかないようだ。当然、保護者の負担も大きいため、自分の子どもは問題がないと公立学校の普通学級に入れたがるようだ。アニュラチャブラシッドスクールは県でもトップクラスの学校であるため、スロー・ラーナー（Slow Learner）には手をかけているが、ハンディキャップ児童生徒はいない、とのことであった。知的や情緒障害の特別支援の詳細をうかがい知ることはできなかった。
- ・タイは大変な富豪と平民との格差が大きく、相続税がないため、富裕層はいつまでも富裕であり、生まれながらにしての家庭の経済状況は学校選択、職業選択を縛っているらしい。そのため、公務員や公立学校教員の給料も安く、公立学校では予算のかかる特別支援学校はもたないのだそうだ。教員の給料の安さは女性教員の多さに反映しているようで、これはマレーシアにも共通している。男性は給料の高い民間企業、エンジニア、医師等を目指すのだそうだ。アニュラチャブラシッドスクールの約2百人の教員の約75%が女性だそうだ。
- ・見学した寺院は、1682年アユタヤ時代後期に建てられた、ノンタブリー県の史跡の学習センター、博物館でもある「Wat Chomphuwek（ワット・チョンフェイク）」。世界で最も美しいプラ・メイ・ソラーニ（仏教の信仰に従った地球の女神）の壁画と白亜の円錐型の仏塔が有名らしい。
- ・ホストファミリーの迎えを待つ生徒は非常に楽しみな様子で、夜から

翌日のスケジュールが決まっている（夜の海釣り、有名リゾート地、ナイトマーケット、夕食）生徒は、ウキウキしていた。ファミリー宅の子どもたちとはもとより、たくさんの仲間ができていようである。流石である。

- ・夕食時には、若者の進路のこと、収入のこと、校長としての苦勞、学校が競わされていること、楽しい学校にするために努力していることなどを率直に伺うことができた。ポイントはアクティブラーニングにあるとの認識は興味深かった。
- ・寺院見学中に引率者が怪我をし、病院に連れて行ってもらった。靴を脱いで入るところで、体を起こす際、階段手すり庇部分の角に頭の上部分をぶつけ、切り傷から出血した。念のため病院での診察を受け、軽傷であることを確認した。サポート体制も万全であった。ただただ「コップン・カー（ありがとう）」と合掌。治療・処方費用は日本円にして約4千円程度で、旅行傷害保険を適用させる。
- ・ホテル近くのコンビニエンスストア（セブンイレブン）で現地の日用品の販売状況を確認した。日本の企業の商品がタイ仕様で所狭しと陳列されている。

4日目〔8月17日（土）〕

概要

- ・生徒はホストファミリーと銘々の活動で、引率者はノンタブリー県の「クレット島（通称Island）」という観光地やアジア最大規模のショッピングセンター「セントラルプラザ」を案内され、日常のタイを満喫した。
- ・送られた画像によると、ホストとの生活や活動状況は大変豪勢なものがあり、本日も全員元気に楽しんでいる。



日程内容

ホテル発（引率者）8:30 = クレット島（昼食まで） ~ セントラルショッピングセンター（夕食まで） = ホテル着19:30

所感	<ul style="list-style-type: none"> ・朝集合すると、なんとカンナ校長も同じホテルに宿泊し、私たちと行動を共にしてくれていることが判明した。カンナ校長は今日もタイスタイルの出で立ちであった。休日を楽しむ気楽さにも気品が漂っている。流石である。同行してくれる他の職員もやはり同宿したらしく、訪問団対応のもてなしに全力投球である。ただただ「コップン・カー（ありがとう）」と合掌。 ・目的地へ向かう間にタイの家庭の一般的な朝の様子（朝食の準備は母親や女性の役割という意識が強いこと、朝食を摂って出かけることなど）、自動車の購入価格（税込みで日本の7～8割位）ことなどを聞いた。日本と共通した部分が多い。マレーシアはイスラム教の祈りの時間と出かける時間の関係もあり、ほとんど朝食は出かけた先で摂ることが多かったし、シンガポールは自宅のキッチンがあまり調理に向いた造りではないことなどから、朝昼晩のほとんどが外食で、誰かが家族のために作って食べるという習慣がなかったのもずいぶん違うことに感心した。 ・また、教職員の週当たりの持ち時数は18時間以内と定められているらしいが、それを超えて担当している教員も多いそうである。中学校では2～3教科を担当する教員もいるそうだ。考え方の基本として、理数科目に境目はないし、タイ語は全員ができるという前提のようだ。 ・「クレット島（通称Island）」は文字どおり「島」である。タイ王国ノンタブリー県の中心を南北に流れるチャオプラヤー川のうねりの一部分を人工的につないで島を作ったとのことであった。もちろん仏教信仰の場であり、人々の憩いの場でありという、観光のスポットである。 ・タイの普段の食べ物の店、観光民芸品の店が島内を席捲している。祈りの香、調理の油、ココナッツや香辛料、調理された食べ物等が島一帯を覆っており、それだけでお腹が満たされ、食欲はやや減退した。 ・乗船前の店で帽子やサングラスを買ったり、飲み物や食べ物を買ったりして、早速民芸品探しに興じた。カンナ校長はさりげなくファッションナブルな帽子とサングラスを購入して身に付けたりして、タイスカートの出で立ちは更にリゾート気分を高めて見せた。引率者一行に、タイ独特の飲食物をこまめに購入して、供してくれる。他の職員はそれを両手にもってサポートしてくれる。 ・引率一行は、木の彫り物、アロマ香やロウソク、タイシルクやコットンの織物、衣類、小物等の民芸品を矢継ぎ早に手にして買い物を楽しんだ。買い物に興じている内は疲れ知らずだったが、タイフードの広場に到着する頃には、船酔いと香り酔いで食欲減退という状況も見られた。木村次長は2回目のタイということもあり、タイフードをどんどんこなしていた。これも流石である。気持ちの切り換えと慣れが大切であることを教えてくれた。 ・いずれにしても、売る意欲と活気、購入したり食したりの活気には驚
----	--

くばかり。日本人や秋田県人にこの活気は見られない。

- ・カンナ校長が買って紹介してくれたタイフードの中に、パーム椰子の皮で包んだ日本のちまき風のものがあり、口に近づけたら、思わずアルコールのある甘酒のご飯！という驚きもあった。パーム椰子の皮細工の団扇も買ってもらった。
- ・船を下りて駐車場までの移動を、サムローという人力自転車が屋根付き座席に人を乗せるものに挑戦させてもらった。モーターバイクが引くのは有名な「トゥクトゥク」だそうだ。優しい気配りのある運転であった。長距離は請け負わないそうだが、料金は距離を問わず20バーツ。タイの生活感と心地よい風を味わった。
- ・次に案内されたのは、タイを代表するアジアNo.1の規模を誇る「セントラルプラザ」である。2日目に案内された所も巨大であったが、その何倍も大きい。秋田県内のショッピングセンターの何十倍である。3時間の自由行動とされたが、購買意欲旺盛な引率者には時間がいくらあっても足りないかもしれないが、買い物に興味のないものにとっては長い散策時間となった。歩き疲れ、タイの観光地を紹介するブースで暫く休憩して鋭気を養った。
- ・書店を2店舗見つけ、タイの子ども向けの本を手にとった。タイ語で日本の生活を紹介している子ども向けの本、3匹の子豚のタイ語・英語の絵本、幼稚園児や小学校低学年用の算数の本、中・高校生のナショナル試験用の数学のテキスト、スパイダーマンやアベンジャーズ等の映画ストーリーをタイ語と英語で紹介した本などを購入した。日本円にして総額約3千円程度。夕食時に話題にもらった。
- ・夕食はタイ風しゃぶしゃぶであった。日本のように、その都度湯通しして食べるのではなく、ひたすら野菜や肉、魚（つみれや蒲鉾、薩摩揚げの類）を入れるちゃんこ鍋風であった。それにしても食欲は旺盛であり、よく話す。日本人は口を開けて間合いを待っていた。レバーやトウモロコシの輪切りがしゃぶしゃぶの具材になるのは新鮮であった。つけだれはもちろん甘辛いタイ風味。ニンニクや青い辛みをふんだんに入れて食していた。醤油に似たたれもあり、それが一番口に優しかった。
- ・マーケットやレストラン、屋台等が活気づくタイではあるが、平均的な家庭の子どもの数は、1～2人ということで、少子化と学校減少は日本と同じであった。祖父母等、子どもの面倒を見てもらえる環境がなく、子育てと生活の両立が少子化の原因とのことであった。
- ・子どもたちの好きな教科は、数学と英語と言うことだった。体育、美術、音楽等の実技教科は、数学や英語のスロー・ラーナー（Slow Learner）に人気があるそうだ。点数による学力優先意識が、子ども、保護者にもあるそうだ。進学のために学校以外で学んでいる子どもも多いらしい。スロー・ラーナー（Slow Learner）は広義では、理解の遅い子どもというよりは、自分のペースを守って学ぶ子どもであり、ノッ

トさんの説明ではそのどちらも含めた捉えのようである。

- ・公務員は残業しないと以前に聞いていたので、家庭の夕食はおよそ家族が揃うかと聞いたら、だいたいそうだとということで素晴らしいことと思った。が、教職員はどうかと聞いたところ、皆遅いとカンナ校長が答えてくれた。校長御自身も毎日遅いらしい。ノットさんは美郷の訪問受け入れが終わると、すぐ秋田県米田教育長の訪問受け入れの予定があり、それも担当しているので、毎日遅いそうだ。因みにノットさんは指導主事歴30年だそうだ。たかが15年程度の教育行政勤めの自分など足下にも及ばない。そして、カンナ校長は小学校教員で数学、科学、英語、体育を指導されたそうだ。バスケットボールの選手だったらしい。
- ・面白いことに、タイの人たちも日焼け止めを塗るらしい。日本製「ビオレU」はブランド品でなかなか手が出ないらしい。
- ・派遣生徒のホストファミリーとの活動では、海へ行き船で夜釣り、寺院巡り、バスを借り切ったのドライブ&ショッピング、町の散策など様々のようである。
- ・明日はいよいよ世界遺産アユタヤ遺跡。生徒もホストファミリーからホテルに送られてくる。どんな表情か楽しみである。

5日目〔8月18日(日)〕

概要

- ・世界遺産アユタヤ見学を第一目標にして出発したが、途中の休憩やアヤタヤ域内の日本人村及び山田長政の功績の学習に時間がかかり、昼食後の時間とホテルまでに要する時間配分から、アユタヤ寺院の見学は車窓からとなってしまった。残念至極。ただし、タイの象徴である象に乗る体験は格別であった。
- ・お別れ会は、会場が一つのファミリーとも感じられるほどで、時の経つのが恨まれるほど、心温まる名残惜しい感動のひとつときとなった。
- ・生徒も名残惜しみつつ、触れあいを満喫していた。






<p>日程 内容</p>	<p>生徒ホテル集合7:00 = ホテル出発8:00 = 休憩10:20 (ドライブインらしき民芸品、飲食販売所) = 世界遺産アユタヤ (地域内の日本人村で山田長政等学習 ~ レストランで昼食 ~ 象に乗る体験 ~ 寺院は車窓から (...ちよっと残念) = ホテル着16:30 = お別れ会 (アニューラチャプラシットスクールにて) 18:30 = ホテル着21:40 (明朝5:30に向けて荷造り、就寝)</p>
<p>所感</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今朝もホテルに集合したのは、ホテルに同宿したカナナ校長をはじめとするいつものサポートメンバーである。とことん、もてなす心意気である。美郷でもやらなければならないという想いを強くした。 ・大型バスがチャーターされ、校長自ら先頭に座し、ドライバーとノットさんに指示を出す。停車の都度、我々に飲食物を購入して渡してくれる。気配りの権化である。バスは軍のものと言っていた。 ・休憩の店では、校長からついにドリアンを渡され、口にしなければならなくなった。校長が新鮮だからおいしいと言わんばかりに進める。以前に食べた感触を思い出しつつ思い切って口にすると、臭いほどの臭みのある味ではなく、つい、一欠片食べてしまった。フルーツの女王とも王様とも言われる所以はよく分からない。 ・アユタヤに近づくと、周辺は広大な米の大穀倉地帯で、稲を刈り取った田んぼ、穂が垂れて色づいた田んぼ、青く背の低い稲の田んぼ、植えたばかりの田んぼ、刈り取られた稲藁を焼いている田んぼなど、日本では稲の育ちの状況を四季を追わなければ見ることができない風景が、なんと同時期に視野に入る不思議な光景である。四季がなく雨期・乾期の違いくらいなので、すべての田んぼに同時に植えて刈り取るよりも、効率がよいのかもしれない。大型機械で植えた跡、刈り取った跡が見て取れる。水牛の姿は見えない。 ・アユタヤの日本人村の学習は有意義であった。資料展示や動画説明により、日本とタイとのつながりや山田長政の功績がよく分かり、生徒のタイに対する認識は相当高まったと思われた。 ・レストランではメニューを見せられ希望を聞かれた。お腹を休めたいとの思いから、何となく理解できるCURRYの文字に惹かれ、GREEN CURRYをお願いした。結果、思いの外辛く、願いは打ちのめされた。中のナスらしき具は柔らかく、辛さを吸収してくれるようでおいしかった。依然として引率者のお腹は元の状態には回復しない。

- ・象に乗るには200バーツの料金。乗象場は、動物園以上の臭いで、目の前の象さんは非常に愛嬌のある身のこなし。「写真どうぞ」と日本語で話しかけるのに安易にのると「40バーツ」と言われていた。象の背中はかなりの高さで、揺れも激しい。写真を撮りながらなどもってのほかである。降りるとまた、「あなたの写真は〇〇バーツ」と貼られている。商売上手である。
- ・土産売り場には、皇室（現皇嗣ご一家）の乗象の様子が掲示されている。ここでは流石に日本人客の姿や声も多い。
- ・せっかくアユタヤまで来て寺院を見学できないのは、何とも無念の一言である。
- ・お別れ会は、これまた心尽くしである。教育局及び学校の関係職員、ホストファミリー家族、保護者会、民俗芸能（演奏家、舞踊生徒）、次に派遣される生徒、北都銀行など勢揃いして、食事をとりながらの歓談となった。引率女性教員は、購入したタイスカートに身を包み、男性は頂いた象柄のネクタイを締めて答礼を示した。
- ・生徒はホストファミリーの生徒やその兄弟、そして一緒のクラスの生徒と話が絶えない。ホストパパ、ママとの別れを惜しむ姿にも、代え難い体験が忍ばれる。言葉と心のつながりに自信さえ伺える。支えてくれたノンタブリー県、教育局、学校、ホストファミリーに心から感謝を申し上げたい。ただただ「コップン・カー（ありがとう）」と合掌。笑顔を添えて。
- ・カンナ校長から生徒、引率が交流事業参加証明書と記念品を手渡された上、教育局の女性副局長や保護者会からも記念品を頂戴した。その他参加した多くの個人からも銘々に記念品を頂いた。
- ・音楽は日本人が分かる「昴」ドラえもん」「上を向いて歩こう」などを会場のBGMとして生演奏してくれた。楽器は現代の電子楽器も混ぜてはいるが、前面に出ているのは伝統楽器である。舞踊は歓迎の時よりも更に色鮮やかで情熱的な演目を披露してくれた。料理は、ノンタブリー県独特のものに加えて、タイ全土の特色ある料理を北東部、西部、中央部、南部それぞれの屋台方式で振る舞う中に、日本人の味覚や胃袋に配慮した料理もふんだんに供された。ここでもカンナ校長からドリアンを勧められ断ることはできなかった。
- ・お返しに、〇〇さんが得意のダンスを披露し、生徒全員が校歌と讃歌を披露して答礼とした。拍手喝采を受けた。最後は沖縄舞踊風の舞踊の輪に全員が引き込まれて踊った。感動のフィナーレとなった。北都銀行の佐藤所長は涙を抑えられないと感激していた。
- ・ホテルに帰ってから、たくさん頂き物と購入土産品のため、荷造りに時間を要すること必至である。明朝5時半集合を楽しみにしたい。

6日目〔8月19日(月)〕

<p>概要</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・予定どおり帰途に就き、順調に手続きをこなし、生徒は誰一人として体調を崩すことなく日程をこなした。 ・羽田空港の乗り換えもトラブルなく、予定どおり秋田空港に到着し、順調に荷物を受け取って美郷町のバスに乗り、美郷中学校で解散した。 
<p>日程内容</p>	<p>ホテル発5:30 = バンコク・スワンナプール空港着6:30 = 同空港発9:35 = 羽田空港着(日本時間)17:30 = 同空港発20:30 = 秋田空港着21:40 = 秋田空港発22:06 = 美郷中学校着23:00 = 解散23:20</p>
<p>所感</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・早朝の集合は順調であった。荷造りと睡眠・起床はよくできた。空港での手続き等で少しのアクシデントもあったが、粛々と通過できた。羽田空港からの秋田便が、約10分遅れたほかは特に問題なし。 ・それぞれが頂いたお土産は予想外の多さで、自分が購入した土産と合わせて、荷造りは困難を極めた。 ・集合時にはなんとか間に合わせたものの、空港でいざ手続きとなると、手荷物の量を減らしたり、スーツケースの重さを調整したり、ペットボトルを処理したりと、順調に着いたはずの空港で思わぬ時間超過となった。そのため、搭乗前の換金や土産買いなどには、あまり時間の余裕はなかった。パーツのまま帰宅してしまった生徒も数名おり、後に円に換金可能な最寄りの銀行へ行くこととなった。 ・出発時に確認した本訪問のキーワード「Health 健康」「Challenge チャレンジ」「Friend 友情」については、生徒は完璧であった。今後、派遣生徒一人一人の成果が存分に発揮されることを楽しみとしたい。 ・福田世喜教育長はじめ、町教育委員会及び学校教職員、そして派遣生徒家族の出迎えに心から感謝したい。 ・また、全日程のツアーリーダーをとって団を統率し、事前準備から派遣中の大小の突発事象への適切な対応、きめ細かな町との連絡調整等に尽力された木村教育次長に心から感謝申し上げたい。 ・出迎えてくれた方々に対する派遣生徒全員の清々しい表情が印象的であった。

《 総合所感 》

- ・本事業の目的の二つの重点事項については、十分達成されたものとする。
- ・(1)の「異文化理解を深める」こと、「コミュニケーション力国際感覚を身に付ける」ことについては、期間、内容、挑戦した生徒の姿勢等から十分なものを感じている。
- ・(2)の「英語の活用」、「交流」、「外国語の有用性・必要性を実感」、「語学力の向上」を目指すことについても、授業はもとよりコミュニケーション必須の生活体験をやり抜いた生徒の表情が、目的達成を物語っている。
- ・大変な厚遇を受けたことに対する答礼として、生徒が全員で校歌や讃歌を高らかに歌ったことは、生徒の底力を感じさせた。
- ・タイ側の姿勢や生徒の満足した様子を丁寧にしっかりと伝えることで、受け入れについての教職員や心構えと体制づくり、そして、ホストファミリーの引き受けなどが円滑に進むのではないかと思われた。
- ・心には心で返すことが肝要かと思われるが、目的の達成ということがそれないようすることも大切と思われる。